

日本社会における「黒人身体能力神話」の受容

——「人種」/「黒人」という言葉・概念との遭遇とその習得を中心に——

川 島 浩 平*

序にかえて——「黒人身体能力神話」を俎上に載せる

女子マラソン、男子やり投げにおけるメダル獲得が（有終の美というよりは）あだ花に見えたほど、2009年ベルリン世界陸上大会は、日本勢不振の中に幕を閉じることとなった¹⁾。対照的に、短距離走におけるジャマイカ勢の活躍が目についた9日間でもあった²⁾。とりわけ100M走においてウセイン・ボルトが打ち立てた9秒58の世界新記録は、その名を運動競技史上に刻む快挙であったといえるだろう。

この間、日本の私的・準公的な言説空間³⁾では、ジャマイカ勢の圧倒的優位を可能にする文化的、歴的要因を究明しようとする一部の努力を圧倒するかたちで、「肌の『黒い』人＝黒人」の強さや速さは生まれつきの要因によるものではないかという、本質主義的な憶測が飛び交った。しかしこれは、今に始まったことではない。一部の陸上競技種目における圧倒的勝利の場面が、「黒人」の「肌の『白い』人＝白人」や「肌の『黄色い』人＝アジア人」に対する本質的な、つまり遺伝的・生理的な優越の表象として広く浸透し、無批判に消費されてきたことは、これまでたびたび指摘されている⁴⁾。ボルトの快走は、こうした大衆社会に流通する表象の現実味を高めるごく最近の事例に過ぎないのである。

さて、本論ではここでいう「黒人の本質的な優越の表象」を、「黒人身体能力神話」として捉えたい。この「神話」は、「黒人はもともとスポーツがうまい」、「生まれつき運動が得意」、「天賦の運動能力や身体能力に恵まれている」⁵⁾、「天性のアスリートである」などの具体的な表現となって、一般人の日常的な会話や、ブログやメーリングリストなどインターネット上の準公的な対話の場で、現在でも流通している。その起源を求めるなら、日本においては過去約半世紀、国際社会に舞台を広げるなら約四分の三世紀にまで遡ることが可能であると考えられる。

* かわしま こうへい 武蔵大学人文学部

「黒人身体能力神話」の浸透は、その起源であるアメリカ合衆国（以下アメリカと略す）だけでなく、ヨーロッパやアジア各国でも見られる点で、国際的な視点から検討されるべき課題である。しかし、それがすぐれて日本的な現象であることも看過できない。たとえばアメリカでは、人種主義に対する警戒や統制ゆえに「神話」はタブーと化し、少なくとも公的な舞台で認知されることは皆無といってもよい。他方日本では、人種主義に対して比較的鈍感な文化的土壌も手伝って、「神話」が一方的に承認されることはあっても、批判的観点から俎上に載せられることは滅多にない。実際日本では、指導的立場にあるものでさえ、「神話」を前提として発言することが多い。たとえば、陸上短距離種目のコーチングでは、『黒人の天性』に対抗するには、日本人は『技能（スキル）』を磨く以外にない」と教えられると聞く⁶⁾。「黒人だから強い」という言説に潜む人種主義を指摘するだけで「褒めてなぜ悪い」「事実だから仕方ない」といった反論を受けることも少なくない⁷⁾。

アメリカにおいて「神話」の肯定と否定が拮抗し、大きな争点を成してきたことが特徴的であるとするなら、日本において争点の不在性に注意が喚起され、問題視されてきたことは特筆に値する。文献調査や意識調査は、相対的、絶対的いずれの意味においても、きわめて高い割合の若者たちが「黒人」なる集団が固有の運動能力・身体能力を有すると信じていること、そして、その多くが、「黒人」の運動能力・身体能力に生得的、遺伝的な根拠があると信じていることを明らかにしてきた⁸⁾。

ここでは、以上を踏まえて、「黒人身体能力神話」を研究の対象とするにあたって、次の2つの立場を措定し得ることに注意を喚起したい。

第一は、「神話」の浸透を国際的な広がりをもつ現象として捉え、その起源と形成・普及の過程をグローバルな視点から解明しようとする立場である。この時、スポーツ大国として、これまで多くの「黒人」アスリートを産出してきたアメリカ合衆国の占める役割と位置は重要である。「神話」の歴史性を検証する作業では、特に1930年代にその起源を求める解釈が有力視されているが、こうした先行研究の成果を視野に入れつつ、さらに踏み込んだ分析が要請されている⁹⁾。

第二は、「神話」の浸透におけるすぐれて日本的な状況に注目する立場である。ここで問われるべきは、「神話」の歴史性や時代的文脈におけるその性質であると同時に、否それ以上に、「量的」あるいは「比率的」な展開のありかたである。すなわち、グローバルな水準に照らし、「なぜ日本において、かくも無批判に『神話』が受容されるのか」である。

本論は第二の立場に立ち、「神話」が日本的に受容される原因を究明すべく、問題の所在を明示し、方法論を説明し、それに基づいて実施した研究調査の一部をなす具体的な分析作業を試み、その作業を研究調査全体の枠組に位置づけつつ、研究調査の全体像を提示することを目的としている。より具体的な構成は、以下の通りである。

まず第一節にて、問題の所在を明示する。「黒人」、「身体能力」、「神話」などの主要概念に定義を与えると同時に、文献調査や意識調査の結果を紹介し、日米間の神話に対する意識や態度の差異の度合を明らかにしたい。第二節では、研究調査の方法論を詳述する。特に、アンケートと聞き取りの結果に基づいて設定した、神話受容の過程を解明するために検討すべき4つの経験領域（1. 実際の「黒人」との遭遇、2. 「人種」や「黒人」という言葉・概念との遭遇とその習得、3. これらの言葉・概念の公的教育カリキュラムによる学習、4. 「神話」を支持するに至った契機と体験）の説明に力点を置くものとする。第三節では、第一の経験領域に関してすでに発表した主要な分析結果を報告する。第四節では、第二の経験領域に関して、具体的な分析を行うものとする。最後に、この分析に続く作業を展望し、本研究調査の意義を指摘して、本論を結ぶものとしたい。

I 問題の所在¹⁰⁾

（1）「黒人」とは誰なのか

本論は、アフリカに出自を有する人およびその子孫に対する呼称として英語の「ブラック（black）」に該当する「黒人」を採用する。黒人の中でも、17世紀から19世紀にかけて全盛を迎えた奴隷貿易によってアフリカ大陸から南北アメリカ大陸へと強制的に移送されたアフリカ人の子孫には、一部のスポーツ競技種目において傑出した役割を果たしてきた、つまり「黒人身体能力神話」の主演として活躍してきたものが少なくない。

歴史を振り返るなら、これらの人々の呼称として、「ネグロイド（Negroid）」¹¹⁾、「ニグロ（Negroあるいはnegro）」、「有色人（person of color）」、「アフリカ系アメリカ人（African American）」¹²⁾ など様々な表現が用いられてきたことが知られている。いずれも、時代の文脈の中で政治的、学術的、社会的に批判を受けた経緯がある。本論が採用する「黒人」も、特定の人間をその個性や差異を無視して、1つの色によって表象される集団に所属するかのごとく記述する点で、問題なしとはいえない。主要メディアには、この語の使用を禁じる傾向も確認できる¹³⁾。しかし、「黒人」なる集団の、アメリカ、そして他の地域における社会的リアリティ（現実性）¹⁴⁾、およびこれらの地域におけるこの語の幅広い浸透度に鑑み、また、ここでいう社会的現実性を含意する表現が他に見出せないという事情を考慮し、以下「黒人」を呼称として一貫して使用するものとする。

（2）文献に見る日米間における意識差

「黒人に固有の運動能力や身体能力がある」との想定は、日米の出版物においてどのように表出してきたであろうか。アメリカの場合、3つの主要紙・誌を事例として検討したい。アン

ケート調査の回答者の半数が「黒人は生まれつき優れた身体的な能力 (physical ability) を有している」とする『USA トゥデイ』紙の特集 (1991 年)¹⁵⁾、「カレッジの白人学生の 24%, ユニバーシティの白人学生の 33% が黒人を身体的に恐れている (physically afraid of blacks)」と報告する『US ニュース & ワールドレポート』誌 (1993 年)¹⁶⁾、「白人男性回答者の三分の一強が、黒人はスポーツにおいて白人よりも攻撃的であり、三分の一弱が、黒人のほうが率直に言って体格がよく強い (simply bigger and stronger) と信じている」とする『スポーツ・イラストレイティッド』誌 (1997 年) がこれにあたる¹⁷⁾。いずれの記者も、これらの数値を高いものみなし、白人による人種主義の高まりを警戒している。しかしいずれの場合も、黒人に特有の身体性があるとする立場が過半数を越えることはなく、運動能力や身体力と人種のカテゴリーの関係をめぐる論争が存在することを示唆するだけにとどまっている。

日本の出版物に目を向けると気付くのは、アメリカに見られるような数値を導き出そうとする努力の奇妙なまでの欠如である。日本の識者は、黒人特有の運動能力の存在そのものに疑いの目を向けるのではなく、その存在を当然視する風潮や世論に対する批判に腐心してきたといえるだろう。例えば人類学者の我妻洋は、今から 40 年以上も前に、多くの日本人が黒人を「運動神経が発達している」とみなしているとの報告を残している¹⁸⁾。時代を下ると 1990 年代初頭には、ジョン・ラッセルが「日本のマンガに登場する黒人はスポーツマンが圧倒的に多い」ために、「黒人＝スポーツマンという先入観を助長している」との警告を発している¹⁹⁾。もっと最近では、日本のサッカー解説に関する山本敦久の指摘が傾聴に値する²⁰⁾。山本は、ヨーロッパ人選手のプレーの特徴を「スピリット」側に、アフリカ人選手のプレーの特徴を「身体」側に組み込む暗黙の了解が存在していると批判するのである。

以上から、2 つの国を、黒人の固有の身体力や身体性、つまり以下に定義する「身体能力」があるかをめぐって世論が分裂しているアメリカと、それを所与の想定として受け入れ、過去半世紀に渡って安定的に維持してきた日本という対照的な関係に配置することができる。

(3) 概念規定：「黒人身体能力」と「神話」

ブービーはすばらしい (Boobie Miles has it all, all in one great package),
その速さと体格と反射神経 (the speed, the size, the athleticism).
プレーを見れば、入場料も高くない (Let me tell you, folks, Boobie Miles is worth the price of admission).
またもやブービーの独走 (Boobie Miles breaks in loose one more time...).

上記は、2004 年封切のハリウッド映画『プライド：栄光への絆』の一場面からの引用であ

る²¹⁾。主人公であるアメリカンフットボール選手たちが所属する高校チームの花形選手ブービーを称えた一節で、「反射神経」と訳された彼の資質を意味する原語が、「アスレティシズム (athleticism)」であることに注目したい（和訳は字幕のもの、英語は英語字幕のもの）。

本論では、ここでやや不適切な「反射神経」との訳語を与えられている「アスレティシズム」が、これまでにみてきた「黒人固有の運動能力」を意味する語として、近年頻繁に使用されていることに注目したい²²⁾。もともと「アスレティシズム」は、イギリスの教育文化史の文脈でパブリック・スクールや大学で生徒や学生が運動競技に熱中する社会現象を意味する用語であり、現在の日本の英和辞典にも「運動競技熱」なる訳語が掲載されている²³⁾。しかし、現在ではむしろ、映画『プライド』にみられる意味で用いられることが多いように見受けられる。

この意味で用いられている「アスレティシズム」の文例に事欠くことはない。ここでは、「ジャッキー・ロビンソンの向う見ずなアスレティシズム (Jackie Robinson, with his reckless athleticism)」²⁴⁾、「われわれ黒人選手は、常にアスレティシズムに恵まれてきた (We've [Black players] always had the athleticism)」²⁵⁾、『『天性のアスレティシズム』を備えた黒人 (the "natural athleticism" of blacks)」²⁶⁾、「バスケットにボールを放り込むダンクシュートや、その他の手段によるアスレティシズムの見せつけを特徴とする『垂直方向の』バスケットボール ("vertical" [basket] ball, featuring dunking, slashing to the basket and other displays of athleticism)」²⁷⁾、「ガーナチームは『黒い星』との異名をもち、選手それぞれがアスレティシズムに恵まれているので、『とてもとても強い』 (Ghana's team, nicknamed the "Black Stars", is "very, very good" because of the players' athleticism)」²⁸⁾などを挙げておく。

日本の報道に目を移すと、「黒人に固有の運動能力」という意味合いで用いられる語の代表格は「身体能力」である。過去における主要三新聞での使用例を取り上げてみよう。『日経新聞』には、「黒人選手に身体能力で劣る日本選手」との解説²⁹⁾や、「黒人特有の高い身体能力を生かしたプレー」との記述³⁰⁾が、『朝日新聞』には、「アフリカらしい持ち前の身体能力」で始まる観戦記³¹⁾や、「あの身体能力があって、あのコーナーのうまさがあれば、だれもかなわない」との引用³²⁾が、『読売新聞』には、「科学的トレーニングの開発で、身体能力にたけた黒人選手を日本選手が破る日もいつか来るはず」との引用³³⁾や、「19歳で98年フランス大会に出場し、黒人特有の身体能力の高さとスピードをアピール」との記述³⁴⁾などが掲載されてきた。

黒人の非黒人との比較において相対的な運動能力の優位を示唆し、先天性を含意する修辭語が伴う場合が少なくないこと等に鑑み、アメリカにおける「アスレティシズム」と日本における「身体能力」をほぼ同意のものとみなし、またそれぞれが頻繁に「ブラック＝黒人」という人物表象と組み合わせて用いられていることから、以下では、『『黒人』として表象される『人種』に固有のものとみなされる運動能力』という意味で『『黒人身体能力』=『ブラック・アスレティシズム (black athleticism)』』を使い、略して「黒人身体能力」を用いるものとする。

なお、特定の人種に固有の運動能力があるとする想定を、現代の科学者が否定しているにもかかわらず、それが社会に広く浸透し、日常会話やメディア報道で、反芻され、再生産されている現実を鑑み、この想定を「神話」と呼ぶものとしたい³⁵⁾。したがって黒人に固有の運動能力があるとする想定は、「黒人身体能力神話」と呼ぶものとする。

(4) 意識調査に見る日米間における意識差

次節で詳述する方法論のなかで、インフォーマントに、アンケートと聞き取りを通じて現時点での神話に対する態度を尋ねている。まずアンケート三択(1. アフリカ系の人他民族集団と比べてスポーツが下手である, 2. アフリカ系の人他民族集団と比べてスポーツが上手である, 3. どちらでもない)を設定し、これに対する回答を手掛かりとして、聞き取りによって、より詳細かつ具体的な情報を入手した。その結果を、現在における日米間の意識差を検討するためのデータとして提示したい。

1を選択したインフォーマントは1人もいなかった。2を選択したものは、聞き取りの結果、「スポーツ全般において上手である」と認めるものと、「特定の競技(バスケットボールなど)において上手である」と条件を付すものに大別できた。3を選択したものは、「民族という属性がスポーツの上手下手を決めることはありえない」とするものと、「特定の競技においては上手である」と譲歩するものに大別できた。

黒人身体能力が先天的なものかどうかに関する立場には、先天性をA. 肯定的に言明する, B. 言外に暗示する, C. 一切示唆しない, の三者がある。2を選択したインフォーマントをこれらの立場によって分類すると、「スポーツ全般において上手である」と認めるものはAかB, 「特定の競技において上手である」と答えたものは, A, B, Cのいずれかに該当した。3を選択したインフォーマントを分類すると、「上手下手を決めることはありえない」とするものはみなCに, 「特定の競技において上手」とするものはA, B, Cのいずれかに該当した。

以上から、神話に対する立場で、インフォーマントを2つの集団に分類することが可能となる。その1つは、全般的であれ部分的であれ、黒人は他の民族集団とくらべてスポーツが上手であると認め、その理由として先天的な要因を肯定的に言明するか、言外に暗示するものであり、この集団を神話受容者とみなすものとする。もう1つは、民族集団によるスポーツの上手・下手はありえないとするものと、特定種目において黒人が他の民族集団よりも上手であるとは認めつつ、その理由として先天的な要因を一切示唆しないものからなる集団があり、これを神話非受容者とみなすものとする。すると、アメリカ人インフォーマント21名中、受容者は9名、非受容者は12名であり、日本人インフォーマント34名中、受容者は32名、非受容者は2名となる。総じてインフォーマントの神話受容度は、日米間で大きな開きがみられ、そのパターンは、文献調査が提示するものときわめて類似しているといえる。

これらの文献調査および意識調査結果は、アメリカでは争点ゆえに、日本では争点の不在ゆえに注目される黒人身体能力神話をめぐる環境が、これまで長期的に存在し、現在も不変であることを示唆している³⁶⁾。

Ⅱ 方 法 論

冒頭で論じた、黒人身体能力神話を分析するための2つの立場に立ち戻りたい。第一は、グローバルな現象として、その起源であるアメリカに主軸を据えつつ、神話の形成と普及の過程を解明しようとする立場であり、第二は、日本というローカルな場において著しく高い比率で受容されている原因と過程を究明しようとする立場である。本節では、このうちの後者の立場に立って実施した調査研究の方法論を説明する。

前節において、日本というローカルな文脈における高い神話の受容度を示すデータとして、インフォーマントの事例を紹介した（34名中32名）。インフォーマントの選定が厳密なサンプリングに拠ったものでない以上、このデータに基づいて日本人一般の状況を論じることには無理があることは否定できない。しかし、前節で試みた文献調査の結果が、インフォーマントの返答が、日本社会全般の神話に対する態度に通じるものであることを示唆していることもまた事実である。

今回の調査では、インフォーマントである大学生の成長の過程に着目し、彼ら・彼女らがこの世に生を受けてから、インタビューに応じた時点までに通過してきた、神話への態度を準備し、決定づける際に重要であったと思われる経験の領域（モーメント）を4つ特定し、それぞれの領域に関する詳しい情報を、アンケートと聞き取りを通じて入手し、段階的に神話に対する立場を決定する過程を検証するものとする。

経験の領域とは、次の4つである。

第一は、「インフォーマントがこれまで／現在、黒人とどのような関係にあった／あるのか」、より正確にいうなら、「あった／あると記憶しているのか」である³⁷⁾。この問いを言い換え、さらに発展させるなら、「インフォーマントは、黒人身体能力神話の主人公である人々と、実際にはどのようにリアルな体験をしてきたのか」、「インフォーマントは、その体験を通じて、どのような印象、感情、意見を抱いた／抱いているのか」、そして「リアルな体験による印象・感情・意見は、ステレオタイプを裏付けるのか」などとなる。第一領域を設定した理由は、多様性と変化に富む実際の経験を照らし出すことによって、ステレオタイプの誤謬を明らかにし、ステレオタイプが浸透する構造と過程を解明する必要性を訴えるためである。

したがって第二領域以降の分析が、ここでいう構造と過程を解明するための作業となる。

第二は、インフォーマントが「人種」および「黒人」という言葉・概念といつ、なぜ、いか

に遭遇し、これらを習得したかである（第四節参照）。これらの問いは、神話を理解し、他者とのコミュニケーションにおいて伝達する上で必要不可欠な語彙の中核をなす2つの言葉・概念を、理解語彙（「聞く」という行為と関わる）および表現語彙（「使う」という行為と関わる）として獲得した経験の時期と内容を調査するために設定した。具体的に問われるのは、『人種』『黒人』という言葉聞いた／使ったことがあるか、それらを「初めて聞いた／使ったのはいつか」、それらを「初めて聞いた／使った状況はどのようなものか」などの点である。

第三は、第二の領域と深く関わるが、その制度的側面に重点をおいたものである。すなわち、インフォーマントが「人種」および「黒人」という言葉・概念を、学校制度による教育カリキュラムを通じて、いつ、いかに学んだかである。第四は、インフォーマントが黒人身体能力神話を、いつ、なぜ、いかに受容あるいは拒絶するに至ったかである。この領域における経験としては、特にテレビ、雑誌、映画その他様々なメディアが極めて重要な役割を果たしている。第三、第四領域については、論末において今後の調査を展望する際に言及するものとする。

インフォーマントとして協力を得たのは、日本の3大学（J1, J2, J3）に所属する34名³⁸⁾およびアメリカの1大学（A1）に所属する21名³⁹⁾の計55名である⁴⁰⁾。調査は、アンケート票を配布し、一定の期間の後に回収するアンケートと、回答者にアポをとり、1人当たり1時間前後の時間を使って行う聞き取りの2段階で実施した。アンケートは、本人に直接、あるいは友人・知人を介して趣旨説明書を配布し、同意を得たものに依頼した（回収率100%）。アンケート票は17ページに及ぶもので、回答には平均1時間が費やされている⁴¹⁾。聞き取りはアンケート回答者55名のうちの51名に対して実施し（実施率92.7%）、聞き取り内容は、同意を得た上でICレコーダーに録音した。

人選にあたっては、筆者が籍を置く大学とそれ以外で、異なる手続きをとった。筆者が籍を置く大学では、講義や演習を通じて知り合った学生のうち、信頼できると判断した学生に逐次依頼し、同意を得たものを対象とした。他の大学では、各大学の教員に調査の趣旨を説明した後、信頼できる学生を紹介してもらうという手順によった。科学的なサンプリングの手法によったわけではないが、ジェンダー、人種・民族的アイデンティティ、出生地などの点でインフォーマントに偏りが生じないよう極力配慮した⁴²⁾。

Ⅲ 黒人との遭遇の様態と度合——「神話なき世界」の実相を求めて

現在の日本において、インフォーマントは、黒人と実際にどのような接点を有し、どのような経験を共有しているのだろうか。その経験が、身体能力神話とは縁の浅い領域で展開していることを検証することによって、本節では、神話の起源を現時点での日常生活ではなく、過去に遡って、年少期からの生育過程に求める必要性を確認したい⁴³⁾。そのために、社会心理学

の理論を援用しつつ、次のような配慮を施すものとする。

前節で述べたように、本節で問うべき主な点は、インフォーマントが「黒人とどのような関係にあったか / あるのか」、「どのような体験をしてきたか / しているのか」、その時「どのような印象、感情、意見を抱いたのか」などである。これらの点については、インフォーマントの語りが自ずと明らかにしてくれるだろう。しかしここで、体験の様態・度合と、印象・感情・意見との間の関連を検討するにあたって、体験を通じて築かれる関係性の粗密・深淺を序列化するための目安が必要となる。

社会心理学者レヴィンジャーとスノークは、社会で生計を営む人々が、出会い、親睦を深め、友情や愛情の絆で結びつき、婚姻などの制度によって社会的に認知されることを求めるようになるまでの過程に注目し、次のように段階を設定している⁴⁴⁾。それは、レベル0、1、2、3からなる4つである。レベル0はまだ接触のない「無接触」段階、レベル1は相手を目にする、相互作用の生じていない「一方的覚知」段階、レベル2は接触の成立から形式的な情報交換が行われるまでの「表面的接触」段階、そしてレベル3は、親密な関係が築かれる「相互性」段階である。この枠組を参照しつつ、本研究のインフォーマントの語りによって再現された接触ないし交流の実態に適合するよう修正を施し、関係の弱いものから強いものの順で次のように設定し直すものとした。

接点が存在しないレベル0を、実際に生じる体験、印象、表象を対象とする本調査では除外し、レベル1を、関係性の始まる契機として、黒人を「見かけたことがある」段階と再定義した。さらにレベル2を、「表面的接触」と見なせる現象にもいくつかのパターンが認められたため、3つに細分化し、黒人と「会ったことがある」、「話をしたことがある」⁴⁵⁾、そして「知人にアフリカ系の人がいる」段階とした。最後にレベル3を、同じ「相互性」の段階であっても、「友人にアフリカ系の人がいる」と「親戚や家族にアフリカ系の人がいる」とでは重みが違うものとみなし、2つに分割した。結果的に、レヴィンジャー / スノークによる4つのレベルを、「見かけたことがある」から「親戚や家族にいる」までの6つの段階へと修正し、これに「その他」を加えた7つを、アンケートの選択肢として設定し、これらの経験の有無を問うものとした⁴⁶⁾。

「見かけたことがある」段階での接触（インフォーマント34名全員が経験）では、恐怖を覚えたり（「なんかこわいって思いました」[アイサ]）、また相手を集団の一部として見なしたり（「数人でわわって」[ナツキ]）する傾向が見られた。その意味では、黒人を「見かける」経験は、そのほとんどが人間的な交流とは無縁の、人としての存在を無視しかねないような視線（『ああ、いるねえ』[チュキ]）を伴うものであった。

しかしより高いレベルの交流では、内実のある経験が増えるとともに、感情の交流が生まれていた。「会ったことがある」（34名中14名が経験）または「話したことがある」（13名が経験）

関係は、旅行先をはじめ、バイト先や英語教育の現場などの公的な空間と、飲み会やラップのステップを踏む趣味的活動などの非公式な空間のいずれでも起きていた。こうした場や状況において、インフォーマントは黒人に対し肯定的、否定的いずれの感情も抱いている。けれども相対的に、相手に対する好感度の高いインフォーマントが目立ったこともまた事実である。そこでは、生徒と教師の関係、腕前に違いのあるラッパー仲間間の関係、外国語として学ぶものとその言語を母国語とする留学生との関係などが結ばれ、教え、教えられる間柄に伴う尊敬、憧れ、感謝などの心情を基盤にして、ポジティブな印象や表象が作られる機会が少なくない。

また、「見かけたことがある」段階から「知人にアフリカ系の人がいる」段階までの体験を通観するならば、そこに1つのパターンを見いだすことも可能である。それは、初対面時に英会話講師の表情が「硬く」、「怖い」と感じながら、やがて「モーフィアスに似ている」、「かわいい字を書く」、「すごくうまい」教え方などの性質を知って、好感を抱くに至ったと、次のように語るヨシコの経験に顕著に表れている。

高校2年の時です。あの、ほんと1年間だけだったので、上達したなんていえないんですけど。ガイジンさんとお話できた、免疫がついたって感じです。夏休みなんか、毎日のように通い詰めてました。そうですね、ああやっぱあの、なんですか、黒人の先生は表情が硬かったんで、なんかへんにビクビクしちゃって、こわいなってイメージあったんですけど、『マトリックス』のモーフィアスにすごく似てて、「モーフィアスだ」、「モーフィアスだ」って思ってたら、字もなんか、見た目に似合わずかわいい字を書いてて、この先生に教わったのは多いですね。

関係性の様態・度合と、そこに伴う心情との間に、厳密な意味では相関とはいえないにせよ、一定の関連を想定することも不可能ではない。黒人を「見かけたことがある」段階にとどまったインフォーマントは、黒人を「もの」であるかに見なす視線を向け、恐怖を抱き、個性を無視するかの発言を残している。しかし「会ったことがある」、「話したことがある」、「知人にいる」などの段階に達したインフォーマントは、ヒップホップの技能に憧れたり、授業で学んだりして、親近感や好感を高めるに至っている。後者の段階に達した数名が、陽気で、友好的で、話の弾む関係を結ぶに至っている点に、特に注意を促したい⁴⁷⁾。

かくリアルな体験によって獲得した心情が、ステレオタイプを裏付けるのかは疑わしい。インフォーマントの中で、実際に黒人とスポーツをした経験のあるものは少なく、「スポーツがうまい」、「身体能力がある」、「運動能力に優れている」という印象を現実の体験から受けたものはほとんどいない。むしろ相対的に密度の高い関係で際立っていたのは、英語の指導という知的な交流を通じてのものである。リアルな体験は、総じて「黒人はスポーツがうまい」とい

うステレオタイプを裏付けていないとみるべきである。

ただし、このようなリアルな体験を味わう者の絶対数および比率が少ないこと自体は、大きな問題である。「知人になる」経験をもったものはごく少数（34名中2名）で、「友人になる」や「親戚や家族になる」段階に達したものは皆無であった。インフォーマントの接触と交流は、概ね公的な空間に限定されており、その多くは不規則かつ偶発的なものである。大多数のインフォーマントは黒人を他者として傍観する立場に安住しているかのようであり、ステレオタイプを検証する契機が与えられることはほとんどない。

社会心理学者ルパート・ブラウンは、ステレオタイプを変容させる要因として、「あるステレオタイプに対する著しい反例となる人物に数人出会う可能性」を挙げている⁴⁸⁾。日本人が黒人と深い交流を持つ機会がかくも制約されている現状にあって、ブラウンのいう可能性が実現する機会のごく限られているといわざるを得ない。しかし、次にみるコウイチのように、その可能性がまったくないわけでもない。

コウイチは、小学校5年の時に、1ヶ月ほどのパラオ方面への船旅を経験した。その時のことは、今でも「けっこう記憶に残って」いるという。

そうですね、そのときに相手にいたのが黒人でした。その他のガイジンもたくさんいました。ほとんど大人です。相手も結構本気でした……（笑）。ちゃんと試合をしました。バスケットもしました。チーム対チームでやりました。大人にまじってぼくだけ子供でした。サッカーとかやるとみんな集まってきました。週2、3回はやりました。5人くらいいたら、黒人は1人か2人くらいでした。でもなんか、テレビでみたりするほど、そんなにスゲエっていうんではなかったです。

1人の小学生が、「テレビでみたりするほど、そんなにスゲエっていうんではなかった」という感想を抱く経験をしていたという事実をあえて重くみたい。これはおそらく、コウイチにとってステレオタイプを打破する、1つの契機ではなかったかと思われる。しかしこのような経験をできる日本人がどれだけいるだろうか。家族で日本を出航して、1ヶ月間ほどのパラオへの船旅につく小学生。日本全国を探しても、それはほんの一握りにすぎないだろう。しかし、その数が少ないとはいえ、リアルな経験に照らすと神話の根拠の脆弱さはたちまち明らかとなる。

34名のインフォーマントによる語りは、「黒人身体能力神話」がやはり神話に過ぎないことを再確認させてくれる。だからこそ、神話がなぜ、いかに浸透してきたのかを、いま改めて問わなければならないのである。そして、インフォーマントがこれまでの人生のいずれの段階で、いかに、どのようなメディアを通じてこれを受容するに至ったのかを明らかにしなければなら

ない。「神話なき世界」の実相は、こうした点を解き明かす必要性を強く訴えている。

IV 言葉・概念（「人種 / 黒人」）との遭遇とその習得についての記憶

黒人身体能力神話、すなわち『『黒人』として表象される『人種』に固有のものとみなされる運動能力』があるとする想定が成立するためには、話者が、神話を構成する個々の言葉または概念の意味を理解し、使いこなせなければならないことはいうまでもない⁴⁹⁾。とくに、「一定の共通性を有する個からなる集団」である「種」が人類にも存在するという了解の上に成り立つ「人種」と、その1つとしての「黒人」の二者は、神話が成立する前提として不可欠の言葉・概念である。インフォーマントは、いつ、いかにこれら二者と「遭遇」し、そしてそれを「習得」したのだろうか。以下でみるように、日本人インフォーマントの経験では、「人種」のほうが「黒人」より「遭遇」と「習得」の時期が遅れる傾向があることは注目に値する。

ここでいう「遭遇」とは、2つの言葉が理解語彙として成立した時点を指し、「初めて聞く」経験に該当するものと定義しておく。アンケートでは「初めて聞いたのはいつですか」という設問によって、その時期を調査する。他方、「習得」とは、2つの言葉が表現語彙として成立した時点を指し、「初めて使う」経験に該当するものと定義する。アンケートでは「初めて使ったのはいつですか」という設問によって、その時期を調査する。同時に、「初めて聞いた / 使ったのはどのような状況でしたか」という設問によって、遭遇と習得がいかに行われたかを調査する。

まとめるなら、神話が成立するための前提として、言葉・概念としての「人種」と「黒人」を理解してから使用するまでの時期と状況を分析することが本節のめざすところであるといえよう。ただし、アンケートと聞き取りで明らかにできるのは、過去における現実としての遭遇や獲得ではなく、あくまでもそれらについてのインフォーマントの記憶であることに留意しておきたい。

アンケートと聞き取りを通じて入手した情報は、インフォーマントにとって遠い過去に起きた出来事に関する記憶に基づいている。「人種」や「黒人」との遭遇およびその習得は、いわば記憶の黎明期とでも称すべき、幼少期に起きたものである。19歳から22歳のインフォーマントの、この時期に関する記憶がどれだけ正確かについては、留保が必要である。実際アンケートでは、「覚えていない」とする回答や、無回答も少なくない。聞き取りでその点について繰り返し尋ねても、「思い出せない」とする場合や、しばらく考え込んでから、ようやく、搾り出すように記憶を語る場合などもある。

しかしそれでも、インフォーマントの記憶と語りに基づいて行う調査には十分信頼するに足る根拠が存在する。その根拠とは主として次の3点である。

第一に、「人種」「黒人」との遭遇とその習得という経験は、とくに日本社会においては非日常的な性質を有するので、比較的鮮明に記憶に残る可能性が高いといえることができる。歴史家トーマス・ゴセットはその著書の冒頭で、幼少期に初めて人種主義に直面した時の経験を活写しているが、彼の記述は、人種に関する記憶が、たとえ幼少期に由来するものであったとしても、晩年まで保持されることを示す好例であるといえよう⁵⁰⁾。インフォーマントはみな19歳から22歳であり、幼少期の出来事がなお正確に記憶されている可能性は決して低くない。実際インフォーマントの語りには、確信や断言を伴うものも少なくない。

第二に、たとえ不正確な記憶であっても、聞き手とのやりとりを通じて、ある程度記憶を呼び戻すことは不可能ではないと考える。調査者が実際に試みた手段の1つに、アンケートに記載された事項に関して、聞き取りで繰り返し、異なる角度から質問し、語り手の表情、話し方、その内容などから確かであることを、聞き手側の手ごたえとして掴み取るというものがある。むしろこの手ごたえは主観的な感覚であり、客観的な保証がないことはいうまでもない。それでも、調査者がインフォーマントに対して、慎重に回想するよう、そして可能な限り正確なものとなるよう繰り返し依頼したことの効果は少なくないことを期待したい。

第三に、以上の2点が、インフォーマントの記憶の正確さを保証するものではないにせよ、記憶というレベルでの分析と比較から学べるものは少なくない。現時点における黒人身体能力神話に対する態度が形成される過程を解明するために、過去の経験に関する記憶の正確さを問うことをひとまず置き、現在どう記憶しているか、つまり記憶の在り方そのものを手がかりとして検討したい。以下で明らかにするように、日本人とアメリカ人それぞれのインフォーマントの記憶には際立ったパターンがあり、興味深いことに、両者の間には顕著な差異が存在する。この差異を、神話の受容度に見られる比率的な格差をもたらす過程の、出発点における条件の質的な相違として提示したい。本節は、慎重に紡がれた記憶を結ぶ共通性が全体として提示するパターンには、神話受容度に見られる日米間格差の原因を解明する手がかりがあるとの前提に立つものとする。

（1）遭遇と習得の時期

私たちは、この世に生を受けてから家庭や社会のなかで成長し、認知力や言語を獲得して発達させ、その過程で本論が焦点を置く「人種」や「黒人」という言葉・概念に遭遇し、それらを習得するようになる。この遭遇から習得までの時期と経緯は、個人差があるとはいえ、幼年期から少年期までのある程度限定された期間に起こるものであることはまちがいない。では、それはいつ起こるのであろうか。

たとえばここに3歳の女兒がいる。この女兒は父親がこぐ自転車の後ろ席に乗って、近所の商店街を通った際に、店舗ではたらく1人のアフリカ系の店員をみつけて、こう語った。「黒

い人がいるよ。どうしてあんなに黒いの。」この時の発言は、おそらく彼女が、「人種」はもちろんのこと「黒人」という概念も知らなかったであろうことを示唆する。ある個人を見かけ、その人の外見が、その他大勢とは相当違っていることはわかった。彼女が抱いた違いの印象は、「黒い人」という表現に集約されている。彼女は違いの理由を、素朴に父親に尋ねたのであろうと推察できる。

あるいはここに7歳の男児がいる。彼はある時父親に向かって次のように切り出した。「僕ね、白人か黒人になるとしたら、白人のほうがいいや。だって黒人だとボクシングをやらなきゃいけないもの。」この発言には「白人」や「黒人」が登場する。彼はおそらく、テレビでマーシャルアーツ系の番組を視聴し、そこで闘う人々の肌の色に印象付けられたのであろう。彼はこの時、すでに「黒人」や「白人」という言葉・概念を習得している。この発言に、「黒人だとボクシングをやらなきゃいけない」というステレオタイプ、あるいは身体能力神話を受容する過程の初期の段階を見出すことも可能かもしれない⁵¹⁾。しかしこの時点で彼が、黒人と白人を「人種」というカテゴリーによって整理する能力を有していたかは不確かであり、おそらく有してなかったと推測できる。7歳は、「黒人」の習得は済ませていたが、「人種」とは未遭遇であった時期といえるかもしれない。

以上はいずれも実話に基づいている⁵²⁾。これらは、幼年・少年期の認識の変化に1つの見取り図を与えるエピソードである。つまり、3歳児は「黒人」と「人種」いずれとも未遭遇、7歳児は「黒人」は習得済みだが、「人種」とはおそらく未遭遇、そのように位置づけることができるのである。もう少し一般化するなら、わたしたちは幼年・少年期を通じて、まず個人間の差異を認識し、ある時点で個人間の差異の中に、集団的な差異があることを理解するようになり、その集団に「黒人」や「白人」というラベルを貼ることを覚え、さらにはその差異を「人種」の違いとして理解し、表現するようになるという発達過程を描くことが可能であろう。このような位置づけと描写にどれほどの普遍性があるかを次に検討しよう。

アンケートでの、次の4つの設問への回答を用いて、インフォーマントが経験した、「人種」との遭遇とその習得のタイミングを推定することが可能である。4つの設問とは、以下のとおりである。まず「人種」という言葉・概念を導入し、その認知度を確認するために、「『人種』という言葉聞いたことがありますか」、遭遇の時期を特定するために「初めて聞いたのはいつですか」、次に「聞く」から「使う」に視点を移して、「『人種』という言葉を使ったことがありますか」、最後に習得の時期を特定するために「初めて使ったのはいつですか」、以上の4つである。これら問いへの回答を集計することで、「人種」との遭遇とその習得の時期を浮かび上がらせるものとしたい。

「聞いたことがあるか」に対して「はい」と答えたものは34名中33名（「わからない」1名）、「使ったことがあるか」に対して「はい」と答えたものは25名（「いいえ」3名、「わからない」

6名）であり、「人種」という言葉・概念に対する回答には、予想以上に個人差があることがわかる⁵³⁾。「初めて聞いた」時期については、アンケートで自由に記述してもらい、それに基づいて聞き取りでは、「小学校以前」「小学校前半」「小学校後半」「中学校前半」「中学校後半」「高校」という6つの選択肢を提示して選択してもらった。回答からは小学校後半に集まる傾向を確認できる⁵⁴⁾。「初めて使った」時期は、「初めて聞いた」時期よりやや遅れ、中学校前半・後半に集まる傾向がある⁵⁵⁾。この集計は、インフォーマントの「人種」との遭遇を小学校後半、その習得を中学校前半と想定することを可能とする。

「黒人」との遭遇と習得のタイミングについては、上と同様の設問で「人種」を「黒人」に置き換えて、推定することができる。「聞いたことがあるか」に対しては、34名全員が「はい」と答え、また「使ったことがあるか」に対しては、32名が「はい」（「いいえ」1名、「わからない」1名）と答えている。この結果は、「黒人」は「人種」よりも回答に個人差が少なく、認知度が高いことを示唆している。「初めて聞いた」⁵⁶⁾と「初めて使った」⁵⁷⁾時期はいずれも小学校後半に集まっている。インフォーマントの「黒人」との遭遇とその習得は、だいたい小学校後半であると想定できる。

以上の結果をまとめ直すと、「人種」と「黒人」という2つの言葉・概念との遭遇とその習得の時期について、2つ相違点を確認できるといえるだろう。

第一に、「聞いた」経験にせよ「使った」経験にせよ、その有無を尋ねた場合、「黒人」の場合は、「人種」の場合よりも無回答や「わからない」との回答が少ない。これは「黒人」のほうが「人種」よりも一般に普及し、日常的な会話で聞かれたり、使われたりする頻度が高いことを示唆する。インフォーマントが生育した環境において、「黒人」のほうが「人種」よりも普及し、流通していたということであろう。

遭遇と習得の対象として、「黒人」のほうが「人種」よりもはっきりと記憶に残っている確率が高い理由の1つは、まちがいでなく、記号としての性質の違いと関係している。「黒人」の場合、「黒人＝こくじん」という記号表現（シニフィアン）と「アフリカ出自の人」あるいは「肌の黒い人」といった記号内容（シニフィエ）との間に1対1の関係性が成立しやすいのに対し、「人種」の場合は、「人種＝じんしゅ」という記号表現が連想させる記号内容が多元的である。「人種」はかつての学術用語であると同時に普通名詞で用いられる。たとえば19世紀の人類学が対象としていた、かつての学術用語としての「人種」だけでなく、「あいつは俺と違う人種さ」という表現にみられるような普通名詞としての「人種」もある。後者の場合は、「好み、趣味、性格などの違う人」程度の意味でしかない。『「人種／黒人」という言葉を聞いた／使ったことがありますか」という設問に「いいえ」、「わからない」あるいは無回答にしたインフォーマントは、共通して、どの意味の「人種」のことかわからなかったからと指摘している。

第二に、「聞いたことがある／使ったことがある」経験は、「黒人」のほうが「人種」より

も相対的に早い時期に発生している可能性が高い。「黒人」との遭遇とその習得は、多くのインフォーマントが小学校を終える時期までに済ませていたようであるのに対し、「人種」の場合は、多くのインフォーマントが中学校時代まで待たなければならなかった。言い換えるなら、「黒人」との遭遇とその習得を通じて、この言葉が表象する人間集団の存在を意識するようになってしばらくしてから、「人種」という言葉・概念と遭遇し、これを習得するのが、日本人インフォーマントに一般的な経験であるといえるだろう。2つの言葉・概念との遭遇とその習得にみられる時間差は、アメリカ人インフォーマントの経験にはほとんどみられないものであり、その意味で、日本に特有の現象なのかもしれない。だとするなら、このずれは、「黒人身体能力神話」の浸透にみられる日本独自のパターンを生成する1つの条件であるかもしれない。このずれの意味をさらに吟味するために、次節にて、2つの概念との遭遇とその習得をめぐる状況を精査するものとした。

(2) 遭遇と習得の状況

インフォーマントが「人種」という言葉・概念と遭遇した状況については、時期に関する回答よりも具体的で明瞭な情報が得られた場合が多い⁵⁸⁾。「人種」との遭遇に関する記憶からは、共通する1つのイメージが現れる。そのイメージとは「教室」である。「人種」という言葉・概念に関する記憶において特徴的なのは、「聞いた」にせよ「使った」にせよ、ほとんどのインフォーマントが「授業で」あるいは「教室で」と答えていることである。これがのちにみるアメリカ人インフォーマントとの回答と顕著な相違点であることを、この時点で指摘しておく。「学校の授業」でと答えたものは、「聞いた」場合は28名、「使った」場合は19名にのぼり、無回答、「わからない」を除くと、それ以外の状況に言及したのは「聞いた」場合が2名、「使った」場合は1人もいない⁵⁹⁾。

インフォーマントにとって、「人種」と遭遇する教室以外の状況をみるため、少数派2名(エナとヨシコ)の発言に焦点を向けてみよう。

エナは、「人種」という言葉を「家族との会話で」「聞いた」という。それは小学校入学以前に、絵本『ちびくろサンボ』を母親に読み聞かせてもらった時のことである。エナは、スコットランド人ヘレン・バナマンによる有名な絵本との出会いを、次のように語る

小さい頃、親に『ちびくろサンボ』の絵本をよんでもらいました。『ちびくろ』というのは人種差別だからよくない」と教えてもらったのが最初だと思います。……印象に残っているので覚えています。

もう1人のヨシコは、「人種」を「テレビから」「聞いた」という。

人種という言葉は、確実にというか、意味も、自分なりになんですけど、理解したのは、たぶん、中学校からだと思うんですね。中学校1年生から英語の授業もはいて、語学を学ぶことで、自分とちがう人種の人がいるっていうかたちで、確実にというか明確になったと思うんですけど、小学校のときは、人種という言葉が「こうこうこういうことだ」ってはっきりはいえないけれど、ただ、映画やなんかテレビとか、そういうメディアを通じてちょっと知ったというかたちだと思います。

エナの発言からは、日本でも、人種差別のような社会問題について、親が就学前の幼児・児童に語る家庭があることがわかる。しかし、残念なことにインフォーマントの中でそのような状況を想起したのは、エナ1人であった。もう1人、アンケート回答で「教室」以外の場面（「テレビ」）を挙げたヨシコの経験に期待したが、聞き取りで得られたその内容はやや具体性に乏しく、エナの語りに匹敵するような現実性をつかみとることも、その正確さについての手ごたえを得ることもできなかった。ヨシコの描写は、鮮明度が落ち、あいまいであると言わざるを得ない。ヨシコの証言は、むしろ中学校での語学教育の影響の大きさを指摘しており、「教室」という場を強調しているとさえいえる。日本における「人種」との遭遇とその習得は、公的な教育カリキュラムという舞台に概ね限定されているといえるだろう。

「黒人」との遭遇には、「人種」の場合との共通点と相違点のいずれもみることができる。共通点は、「授業で」・「教室で」の割合の大きさであり、選択肢カテゴリーのなかでもっとも多かった⁶⁰⁾。相違点は、「人種」の場合よりも、「授業で」以外とする回答の割合がはるかに高かったことである。「聞いた」場合では、「メディアから」8名、「家族との会話で」5名、「隣人にいたから」3名など、合計すると「授業で」以外は、「授業で」にほぼ匹敵する数にのぼった⁶¹⁾。

「メディアから」とする8名の半数は、スポーツに関連する記憶を想起している。モトシはファンだったプロ野球チームに黒人選手⁶²⁾が在籍しており、家族で応援する中で、「黒人」という言葉を間違いなく聞いたり、使ったりしたという。モトシ曰く、

クロマティですね（笑）。家が巨人ファンでした。自分もまあファンです。ちっちゃいころだったら、それ以外の記憶はあまりないです。小学校前半、1、2年だったと思います。すごい野球がうまいといいイメージです。わるいイメージはないです。

ミチコは、ソウル五輪の陸上100Mで風のように走りながら、ドーピングで失格したカナダ人選手⁶³⁾を思い出し、「黒人」との遭遇の状況について「授業ではなく、テレビだ」と言います。小学校高学年じゃなくて、もうちょっと若いころ、中学年くらいに、陸上かなんかのテレ

ピをみて、世界陸上、ベン・ジョンソンの時代です」と語る。フミにとっては、お正月番組として定番の箱根駅伝での、アフリカ人留学生選手⁶⁴⁾の走りが忘れられないという。「箱根駅伝で、小学校の時、山梨学院で活躍していた選手いましたよね。名前覚えてないけど、その時一緒に活躍したのが早稲田の渡辺「康幸」選手なんです。あの時競ってた黒人選手を覚えてます。」コウイチにとっては、アメリカプロバスケットボール界で一世を風靡したマイケル・ジョーダンがきっかけである。小学校3、4年のころ夢中で読んだバスケットボールの雑誌に、「黒人プレイヤー」という語句を見つけた記憶があり、「『黒人』という言葉は、授業よりもバスケット関係で聞いたと思う気持ちが強いです」と語る。

しかし、「黒人」との遭遇の記憶は、スポーツ番組に限られているわけではない。NHKの教育番組に言及するインフォーマントも複数いる。その1人はユウイチである。

小学生でテレビを見て、結構低学年のころだと思うんですけど、『セサミストリート』とか見てて、黒人の人がいた覚えがあるんです。小学校1、2年のころですね。親の影響で見てました。「みろっ」で強制はされてないんですけど。自分もキャラクタとか好きで。『黒人』という言葉を] そうっすね、たぶん知ってましたね。母親か誰かが言ったと思うんですけど。自分もなんで違うんかなって、多少は思ったんですかね。

類似した記憶は、チュキの語りにも綴られている。

『セサミストリート』に黒人の女の子とかでていて、そこらへんが初めての遭遇ではないかと思います。……たしかに小学校低学年のころです。なんか、「黒人」って名前は知らなくても、「黒い人」って感じです……そうですね、もっと前かもしれないし、そうでないかもしれません。

「メディアから」の記憶を具体的に語った1人であるヤスコは、お茶の間の人気者であったコメディアン⁶⁵⁾について語っている。

やっぱ、親と同じ言葉使うじゃないですか。だから親が「黒人さん」っていったら、私も言うし。たぶん普通に、中学年ころには知ってたと思うんです。……親との会話の影響が強いです。……たぶん普通に、オスマン・サンコンさんとかいるじゃないですか。「あの黒人さんの名前なんていうのかな」みたいに使うと思います。

ここで、黒人身体能力神話の日本的な受容のありかたとの連関を後に考察するための準備を

兼ねて、「黒人」との遭遇の舞台がメディアであったと記憶するインフォーマントの語りに伴う印象に、とりわけ感情の動きや方向性に焦点を置きながら、注目したい⁶⁶⁾。スポーツを媒介とする遭遇の場合、そこに生じるイメージには、ファンとしての愛着や優れた能力に対する尊敬や羨望など、肯定的で積極的（ポジティブ）な心情が伴ったことが容易に推測できる。形成される心象は、好意的な感情に裏打ちされていたとみるべきであろう。教育番組の登場人物に言及する証言2つでは、スポーツ選手に対するようなポジティブな方向へのベクトルは感じられない。とはいえ、教育番組の登場人物に消極的・否定的（ネガティブ）な印象を抱くことは想定しにくいので、好意的ではなかったとしても、中立的であったとみなすべきであろう。コメディアンの場合は、お茶の間の人気者に対する親近感を伝える口調は、ポジティブな指向を伝えている。総じて、メディアを通じての「黒人」との遭遇には、中立的からポジティブに向けた方向性を伴う印象が形成される可能性が高いとおきたい。

しかしそれが、「家族との会話で」とした5名になると、かなり趣が異なってくる。そのうちの3名は絵本『ちびくろサンボ』を読んでもらった時ではないかと語る。「人種」との遭遇の場合に検討したエナもここに含まれる。ここでは他の二者、アツコとチハルの語りに耳を傾けたい。アツコの場合、読み手は必ずしも親ではなかった。曰く、『ちびくろサンボ』を思い出しました……そのぐらいかなって思います。……親より、たぶん幼稚園の先生とかのほうが多いです。……話がすきだというわけではないですが……。」チハルの話も、概ね似通っているが、遭遇の時期の早さを示唆する口調に注意したい。また、「ちびくろ」が人間から犬へと変化したとの指摘も興味深い。

「『黒人』との遭遇を思い出すのは」むずかしい……たぶんすごい前からって気がするんですけど、「黒人」って言葉は「人種」よりいっぱい聞く気がします。昔『ちびくろサンボ』っていう本がありました……それがなんか犬が主人公になって出たりして、「チビクロ」って犬がです。その本が家にあって、うちの母がおもしろそうだって……保育園のときでした。母に、読んでもらったんだと思います⁶⁷⁾。

アイサは、アメリカで撮った父親の写真に黒人が写っており、その時の会話を思い出しながらこう語る。

たぶん、小学校1，2年くらいには学んでいたと思います。お父さんが外資系なんですよ。で、なんか昔若い頃の顔とかが写ってて、アメリカ人で一緒に写っている人がいて、「黒い人みたい」って、そう思いました。でもたぶん違和感があったんだと思います。「あ、こんな人もいるんだ」みたいな。

フミコが記憶している家族の会話には、これまでの証言で黒人に対してもっとも否定的な事例が含まれている。

うちの祖母とか、曾祖母とかが黒人のことを「土人」と言っていて、なんかほんとに差別的な感じで使っていました。……その、たぶん幼稚園かそこらだと思います。……黒人を呼ぶ言葉自体がすごい差別的だと思ったのと、あんまりいい使われかたはしていなかったと思います。……[2人とは]一緒に暮らしていました。……やっぱり黒人にたいして知識がないのと……知識はあっても、実際にかかわることがないっていうか……戦争は2人とも経験していますが、差別意識とはつながらないと思います。……世代的なものと、地域もけっこうすごい田舎なので。

「家族との会話」を遭遇の契機とする語りのうち、『ちびくろサンボ』を媒介とする場合、その場での感情の動きや方向性を判定するのはやや難しい。それでも、ポジティブとは言い難いニュアンスがいずれの語りにも付きまとっていることに留意した。幼いエナは、「人種差別はいけないこと」を母から教わったという。童話としてのおもしろさを感じると同時に、母からは訓辞的な教えを受けたエナは、どのような心象を抱いただろうか。仮にエナが早熟で、差別の犠牲者としての黒人に同情を覚えたとしても、犠牲者に好意的、積極的な感情を抱くとは限らない。「話が好きだったというわけではない」と語るアツコや、サンボが「チビクロ」という犬に主役の座を奪われたことを知ったチハルにも、ポジティブな心の動きを望むのはやや無理がある。アイサの場合は、彼女の言葉を借りるなら、「こんな人もいるんだ」という「違和感」であり、フミコの印象は、いわばもっとあからさまなネガティブと切り離せないものだった。「土人」という表現、「田舎」という自覚、「偏見をもちやすい」という自己評価、いずれからとも想起されるのは、その底流に潜むかなり根強く、閉鎖的で、否定的な感情である。「家族との会話」を契機とする「黒人」との遭遇では、中立から強くネガティブを指向する印象を拭うことはむずかしい。

遭遇の機会を「隣人にいたから」とする3名にサトコ、カオル、エイコがいる。それぞれは、日本人家族が黒人の隣人を持つ状況を具体的に記述している点で示唆に富んでいる。

サトコの場合、自宅のあるマンションに黒人の家族が居住していた。

低学年のころです。たぶんたしかです。F市に住んでたころなので。うちのマンションの上に住んでて、黒人系でした。2歳上の姉や母との話に、結構出てきました。うーん、なんか、ちょっと「変わってるところもあるけど」、なんか「変わってるよね」みたいな。交流はあんまなかったです。ときどき、同じエレベータに乗りました。……トラブルとかは

ないです。他のマンションの人と話したことはぜんぜんないです。

カオルは、小学校3年生くらいの時の転校生が黒人だったという。

その時にはもう、「黒人」って言葉を知っていたなって感じです。……そうですね、日本人よりも黒い。……転校してきました。……日本語もできます。女の子です。私の学年には女の子が2人転校してきました。前から日本にいたらしくて、日本語の勉強はしてたみたいで、普通にベラベラでした。最初は、なじめてなかったんですかね、でもみんな、ものめずらしげで、近寄ったりして、すぐ仲良くなってたと思います。中学も一緒でした。その先はよく知らないです。家に来たことないですけど、近所だったんで小学校のころは遊んだりしていました。

エイコの場合は、同じアパートの住人だった。3人の中では一番接触する機会に乏しく、思い出話の中での存在に過ぎないようである。

昔アパートに住んでたんですけど、あたし全然おぼえてないんです。その時、1階に住んでたらしいんです。あんまり会わなかったんですけど。引っ越してから、「えっそうなの」みたいな感じでした。……幼稚園くらいまでです。そのときは知らなかったんです。近所づきあいとかは、あんまりありませんでした。後になって、ただ単に話題の一部として、思い出話のなかででてきました。

「隣人にいたから」とする3名の場合、もっとも価値判断を伴う発言をしているのはカオルで、どちらかというとポジティブな口調で、「普通に話したり」、「近所だったんで遊んだり」する仲だったと語る。しかしそれ以上の絆で結ばれた関係ではなかったようである。他2名は、中立的か、やや否定的なニュアンスを感じさせる。隣人とはいえ、近所づき合いが生まれる余地のない、遠い影のような存在ではなかっただろうか。黒人の隣人をもったインフォーマントが示唆するのは、中立か、そこからややポジ、ネガ両方向にぶれる指向性であるといえるだろう。

「黒人」という言葉・概念を習得した状況では、遭遇の場合よりもさらに「教室で」や「授業で」以外の場の割合が高くなっている。「教室で」・「授業で」とする12名に対し、「メディア報道がきっかけで」5名、「友人との会話で」4名、「実際に見たときに」4名、「家族との会話で」2名であり、授業以外の場合は、全体として「教室で」・「授業で」を3名も上回っている。「黒人」という言葉を使用するという能動的な行為は、受動的な姿勢を期待される時間

の長い授業よりも、それ以外の場でのほうが取りやすいということであろうが、それも頷けるというものである。

「メディア報道がきっかけで」とする証言は、「メディアで」初めて聞いた経験と、その内容が概ね類似しているので、その他の経験について以下にみるものとした。

「友人との会話で」とする2人のうちの1人チユキは、「黒人」が「いじめ」の場でしばしば使われた言葉であるという。

小学校くらいの頃です。色の黒い人に対するいじめです。あんまりいい使い方じゃありません。私も言ってたかもしれない。まちがいなく小学校の前半だと思います。いじめられる人は1人ですね。たぶん日焼けかなにかで。私は、なんか基本的にいじめっ子じゃないと思っているんで、誰かがやって、それにつられてだと思います。私には、ちっちゃいときから「黒」っていいイメージがない。祖母が、なんか、なんでか知らないけど黒人嫌いなんです。黒人の人がテレビに映ると必ずびって、替えちゃうんですよ。

ミチコは、加害者の立場ではなく、被害者の立場からの経験を語る。

小学生で日焼けをして真っ黒になったとき、いわれました。友達にいわれました。「黒人」みたいって。今だったら別にいいんですけど、そんなときは、「そんな黒いんだ」と思って、「ちょっといやだ」と思ったかもしれません。そういうふうに言われたんだって人にいいました。

「友人との会話」で口にされる「黒人」は、色が黒いことに対する女性の忌避や嫌悪の標的として利用される表象のようである。日焼けした結果を「黒人みたい」といわれたり、あるいはもともと肌が黒いのでいじめたり、ここに伴うニュアンスは自ずから否定的にならざるを得ない。チユキは、小さいころから「黒」にいいイメージを抱かなかったと回想しており、その原因を祖母の「黒人嫌い」に見出しているようだが、ここでの発言は、先のフミコの語りを彷彿させるものである。

その他、「黒人」という言葉を初めて使った状況として、「実際に見たときに」としたもの4名と、「家族との会話で」としたもの2名うち、その時の様子を具体的に語っているそれぞれ2名、1名について、最後にみておきたい。

タイチは、街角で見かけた外国人にについて友人と語った時ではないかと想起する。

小学生の時、言葉を覚えたあと、黒人を見た時に、友達とかと使ったと思います……。A

村でみた時もあるし、写真とかもあります。たぶん、はい……電車のなかとかでも、学校ではないです。ALT（Assistant Language Teacher）の先生も白人でした。

アイは、駅で見かけたときではなかったかと語る。

ちょっとわからない。でもO市で、JRの改札らへんでみたとき、軽く、『あ、黒人さんや』みたいな感じで、使ったと思います。でもそのときそれ以上の会話があるかといったら、ないと思います。

アイサは、「家族との会話で」使った時の経験を語る。

「黒人」が差別的な言葉なんだよってというのは、たぶん親とかから学んでたから、「あ、言っちゃった」みたいな感じです。

「実際に見たときに」とする証言に感じるのは、単に事実として確認するかのような、客観的な視線であり、そこにどのような感情が伴ったかは察しにくい。話者にその点を尋ねても、要領を得ない場合が少なくない。「家族との会話で」とするアイサの場合は、明らかにマイナスを指向している。差別に結びついているという点で、色黒に対する忌避意識を想起させるチュキ、ミチコの経験に通底するものがあるといえるだろう。

「黒人」という言葉・概念との遭遇とその習得では、とりわけ「人種」と比較した場合、はるかに多様な情景描写がなされ、様々な状況や場面で言葉が発せられ、様々なイメージや表象が行き交い、また構築されていることがわかる。その状況にみられる特徴の第一は、こうした交換や構築の現場に伴う感情や解釈や評価の問題と関わっている。上の数々の語りが示唆するように、そこで交錯するのは、肯定と否定、積極と消極、ポジとネガとして対置しうる好悪感情である。正負一方向に集約しきれない異質な要素の混在状況が成立しているといえるだろう、おそらくこれは、幼少期のインフォーマントたちが「黒人」という言葉・概念に遭遇し、それを習得した時の、少し大袈裟な言い方をすれば、心理面での無秩序と混乱を反映しているのではないと思われる。そこに投影される「黒人」イメージの基調に潜むのは、スポーツ競技での卓越と栄光、それらに対する憧れ、羨望、好意であると同時に、実際の人間関係、つまり家族の歴史に蓄積されてきた記憶と価値観、友人とのやりとりで学んだ、地域社会のネットワークに根付く閉鎖性、隣人としての接触で生じる違和感など、対立し、矛盾する印象、意見、判断、評価などの共存である⁶⁸⁾。

特徴の第二は、こうした混在や共存の状態が、ある特定の方向に収斂されるかたちで解消さ

れない理由に関わるものである。つまりそれは、「黒人」を語り、それを聞く状況における、話者と黒人との間接性と距離感である。ほとんどの語りにおいて、当の黒人は、より親密な関係を築き得る環境に存在せず、相互理解を促すような接触が生まれる可能性は欠如している。メディアで映し出されるスポーツ選手や芸能人は実在感の希薄な遠い存在であり、家族や友人の語りに登場する「黒人」もまた「ちびくろサンボ」や「土人」など記号的な意味合いが強い場合が多い。「実際に見て」あるいは「隣人」として「黒人」を意識する場合でさえ、近い存在として言及されている例は皆無に近い。こうした、内実ある経験を提供する機会が欠如した文化的環境では、もし制度的なシステムによってステレオタイプが生産された場合、それに対抗する知が作動し得ないのも当然であるとはいえないだろうか。

(3) アメリカ人インフォーマントの経験

「人種」と「黒人」の両言葉・概念との遭遇とその習得についてアメリカ人インフォーマントに調査した結果は、彼ら・彼女らが一般に、日本のインフォーマントよりも、いずれをも早期に、しかも時間差のない状態で経験していることを示唆する。「小学校以前」との回答の多さと割合の高さはとくに目立っている⁶⁹⁾。これはおそらく、「人種」が「黒人」に付随するかたちで（あるいは「黒人」が「人種」に付随するかたちで）、幼少期のインフォーマントと遭遇し、あるいはインフォーマントに習得されたからであろうと思われる。「黒人」を自己認識の枠組みに定位する際に、「人種」はほとんど不可避免的に動員されるかのようである。

もう1つの特徴は、遭遇や習得の場としての教室や授業の相対的非重要性、あるいは学校教育以外の場の相対的重要性とでもいえようか。それは、単にそうした回答数の多さだけでなく、語りの内容の質的な豊かさからも導きだせる結論である。教育以外の場における「人種」・「黒人」との遭遇とその習得に関する語りの内容は、非常に深く、濃く、かつ多様である。日本人インフォーマントの語りが、とかく皮相的であったのと顕著な対照関係にある。日本人インフォーマントの語りは、「黒人」に対する印象をポジ対ネガという一元的なレベルで整理することが可能であったが、アメリカ人インフォーマントの語りは、次第に深まり発展する、3つのレベルにおいて遭遇と習得の経験が展開したことを示唆する。

第一に、多民族国家の構造の中で必然的に生じる「他者」との遭遇を契機として、そこで生じる「相違」に対する関心を方向付け、秩序付ける際の意識の動きのレベルがある。この時、動員される言葉・語彙が「人種」であり「黒人」であったことは、多くのインフォーマントの語りからも明らかである。自分は「人種」的に誰で、何者なのか。「他者」は「人種」的に誰で、何者なのか。両者の差異をどのように理解し、説明するのか。これらはみな多文化教育の課題でもあるが、教育の現場で取り組まれるずっと以前から、家族や幼年期の仲良しグループの中で、アメリカ人はこの課題に直面するのである。

第二に、インフォーマントの語りは、こうした意識の動きにおける自己と「他者」の位置づけが、個人レベルだけでなく、というより個人レベルを越えて、ある程度の集合的な広がりを伴いながら成されていることを窺わせる。それは、エスニック集団としての自覚と認識を促す制度的な表象システムが日常的、恒常的に発動しているからであろう。たとえば黒人にとっては、マーティン・L・キング誕生日や黒人史月間などが制度的な表象システムの最たる事例であり、こうした記念行事は集団的なアイデンティティの拠り所として、またそれを保証する装置として人種意識を高揚させずにはおかない。その結果、人種的な差異は個人のものであると同時に、集団間の境界線として認知され、理解されることになる。

第三に、こうした集団間の差異は、常に何らかの基準の下に解釈され、評価され、その結果として集団間の上下関係を意識的にせよ、無意識的にせよ規定するような契機を伴う可能性と緊張をもたらしていることに留意したい。言い換えるなら、遭遇と習得の経験は、人種やエスニック集団間の区別や差別とほぼ不可避的に連動せざるを得ないといえよう。ここでいう区別や差別は、日本人インフォーマントの語りにみられたような個人レベルでのポジ対ネガの印象といった表層的な意識の動きではなく、社会の構造と秩序においてそれぞれの集団全体を配置するような、規模が大きく、根の深い意味合いを有するものである。それゆえ、遭遇・習得者の人間観や世界観に影響を及ぼしかねない強い意味合いを兼ね備えている場合も少ない。まただからこそ、危険な傾向として糾弾され、対抗するイデオロギーの構築を促し、あるいはタブーとして文化の底流に潜んでしまうことになる。むろんここでいう区別や差別には、「黒人」はスポーツで「うまい」「速い」とする言説や、居住区を指して「あそこには近寄るな」と諭す言説なども含まれる。

アメリカ市民は幼少のころから、民主主義国家・多民族国家にとって最大悪の1つに数えられる人種主義にも、それを討つ多文化主義の思想にも、晒されざるを得ない環境におかれているのである。インフォーマントの証言は、それを如実に示している。

むすびにかえて——脱神話は可能か？

冒頭でも述べたように、今回の研究調査はアメリカを起源としてグローバルなスケールで流通する黒人身体能力神話が、日本においてきわめて広く無批判に受容される原因を究明することを目的としている。言い換えれば、1つの「神話＝人種主義言説」のグローバルな流通経路から、日本的な分岐が生じる仕組みを解明する試みである。本論をこの試みの中に今一度位置づけるなら、日本的な分岐の一過程にあたる「人種」と「黒人」という言葉・概念との遭遇とその習得の機会に焦点を絞り、この過程における確たる評価的、判定的なポジション構築の不在を明らかにすることで、その後にやってくる教育現場での、そしてメディア報道による言説

や表象作用の相対的な重要性を照らし出すことにある。

遭遇・習得における特徴を、以下のようにまとめておこう。「人種」の場合、状況が限定され、つまりほとんどが教育の場というお膳立てで学習されたのに対し、「黒人」の場合、教育が果たした役割は小さくないとはいえ、もっと多様な場面や状況が浮かび上がった。しかし「黒人」に対する感情や態度に、共通の性質や方向性はなく、むしろ矛盾する判断や評価が、混乱や態度の保留をもたらしたであろうと思われる。それゆえインフォーマントは、「人種」とは「初対面」であり、「黒人」とは「再会」であったかもしれないが、教室という場で、「人種」と「黒人」のいずれをも、教科書や資料などの教材を通じて、教員から教授され、伝達されたのである。同時に、そのころ映像や言説として多量の情報を入手することになるマスメディア、とりわけテレビに、神話の認知と受容に向けて決定的な影響を受けたことを、その語りは裏付けている。したがって、黒人身体能力神話の日本的な受容の度合とパターンを解明するための作業は、教育の場での、そしてメディアによる言説や表象のありかたに分析の対象を移す必要がある。実際の分析は後の作業に譲らなければならないが、以下、今後の展望を兼ねて、それぞれの特徴に触れておく。

インフォーマントの多くは、「黒人」という言葉・概念を、中学校において、国語でも英語でもなく、まず社会科の地理的分野で「奴隷貿易で強制移送された人々」として、それから、学習年次が後になることが多いようであるが、歴史的な分野で「リンカーンによる宣言によって奴隷から解放された人々」として学習した。インフォーマントには、教科書の語句解説や資料集のページを開き、「人種」が「白色人種、黒色人種、黄色人種」からなるとする記述を目にしたものも少なくなかった。指導要領に基づく中学校教育からは、「奴隷貿易の犠牲者として南北アメリカ大陸に連れ去られ、過酷な肉体労働を強いられ、やがて奴隷解放宣言によって救出される悲劇の主人公の子孫で、『白色人種』とも『黄色人種』との異なる『人種』を構成する人々」としての群像が浮かび上がる。

同じころインフォーマントは、マスメディアによって、悲劇の主人公の子孫たちの数々の栄光の場面を目撃することになる。インフォーマントのメディア視聴の傾向として、テレビへの依存度の高さ、オリンピック視聴率の高さ、陸上競技種目への関心の高さなどは特に注目すべきである。こうした諸点が、神話受容の媒介的役割を果たしたことは想像に難くない。先祖たちの悲劇的な歴史上の経験と子孫たちのアスリートの栄光という、極端な暗と明のコントラストがいかなる影響をもたらしたかは、さらなる検証が必要である。しかし、そこにある種の「贖い」を読み取ろうとするインフォーマントが少なくなかったことを申し添えておく。いずれにせよ、神話の受容において教育とメディアの果たした役割はきわめて重要で、その分析が不可欠の作業であることに留意したい。

神話の浸透の日本的分岐は、日本におけるアフリカ / アフリカ人に対する理解度の低さと

ステレオタイプの蔓延という、より大きく根深い問題の一面を成している。脱神話が、この問題への対策として大きな貢献を成す可能性を示唆することで、本論の締めくくりとしたい。

アフリカ研究者はこれまで、アフリカという大陸とそこに位置する国々や文化圏の知名度の低さを嘆いてきた。アフリカ史概説書の代表格ともいえる『新書アフリカ史』の冒頭で2名の著者は、「日本人にとってアフリカは遠い大陸である」と述べ、日本との関係史を著した2名の研究者も、「われわれ日本人の多数にとり、アフリカは依然として『未知の大陸』であり、第二次世界大戦以前のステレオタイプのアフリカ観を払拭できずにいる」と宣言している⁷⁰⁾。差別的なアフリカ観は、現代の中等教育の教材にも息衝いている。教科書の多くは、欧米人の集団を「民族」と呼ぶのに対してアフリカ人の集団を「部族」と呼び、生徒や学生に「アフリカ」から連想する言葉を挙げさせると、「砂漠」、「黒人」、「アパルトヘイト」、「飢餓」、「貧困」など、過半数がネガティブなニュアンスの伴う言葉で占められるという⁷¹⁾。

こうした単純な印象や理解とは裏腹に、最近の遺伝学的知見は、アフリカが、地球上の他のいかなる地域よりも多様に富む大陸である可能性を強く示唆している。例えば、ある遺伝学者によれば、「アフリカ人の間における遺伝的な変異が、アフリカ人とユーラシア人の間における遺伝的な変異よりも多い」という⁷²⁾。黒い肌という見た目だけの表面的な共通性をまとった身体からは、身体面だけでなく精神面においても、安易な一般化を拒む、多様な力が発揮される。こうした力の1つとみるべき文学的想像力が作り上げた「豊饒なアフリカ世界」に心を打たれて、アフリカ研究の道に入った学者もいる⁷³⁾。

多様なアフリカ人／アフリカ世界という現実には照らすなら、私たちのアフリカ人／アフリカ世界に対する認識の浅さと単純さは目を覆うばかりであり、こうした現状の一部をなしつつ、かつその継続を促す要因の1つが黒人身体能力神話であることに、いまさら多言を要すまい。

脱神話は可能か？ アメリカの黒人は、19世紀には、将来的に「種」としての絶滅を危惧されるほど、弱く、病理的な身体を持ち主とみられていた。20世紀の中葉には、短距離走で秀でたとしても、心肺能力に劣るため長距離を走り切ることのできない人々とみられていた。しかし今日では天性の万能アスリートとみなされている。こうした、アメリカにおける今日までの黒人観の変遷に鑑みるなら、変化は常に起り得ると考えるべきである。教育カリキュラムとマスメディアという主要な影響力の出所に継続的に関与・干渉することによって、ステレオタイプの形成を戒め、生徒や視聴者にバランスのとれた人間観と文化認識をもたらすことは決して不可能ではないだろう。本論が、そのためのささやかな一歩を刻むものとなることを期待したい。

注

- 1) 尾崎好美が女子マラソンで銀メダル、村上幸史がやり投げで銅メダルを獲得した。日本のメダル獲得数はこの2つで、総獲得数は出場国の22位にあたる。大会前のメディア評判に対して実際の成績が見劣りするの、よくあることであり、2009年大会に限られた現象ではない。
- 2) ジャマイカは同大会で金メダル7個、銀メダル4個、銅メダル2個、合計13個を獲得し、総獲得数では米国(22個)に次いで2位だった。ジャマイカが人口280万人程度の小国であることを考えれば、この獲得数は快挙であるといえる。
- 3) 公的な言説空間にも「神話」は浸透している。例えば、次節(3)で紹介する主要新聞記事からの引用を参照のこと。しかしマスメディアの一部、とくにNHKテレビ放送などは、人種主義に対して強く警戒する姿勢を取っており、ここでは敢えて「公的」とは言わないこととする。
- 4) 以下の業績などを参照。David K. Wiggins, "Great Speed But Little Stamina': The Historical Debate Over Black Athletic Superiority," *Journal of Sport History* 16 (Summer 1989): 158-185; Patrick B. Miller, "The Anatomy of Scientific Racism: Racist Responses to Black Athletic Achievement," *Journal of Sport History* 25 (Spring 1998): 119-151; Mark Dyreson, "American Ideas about Race and Olympic Races from the 1890s to the 1950s: Shattering Myths or Reinforcing Scientific Racism?" *Journal of Sport History* 28 (Summer 2001): 173-215.
- 5) 「運動能力」と「身体能力」という2つの概念はどう区別されるべきだろうか。運動能力を、スポーツ(運動競技)をおこなう能力を意味するもっとも一般的な概念であるとするなら、身体能力は、「フィジカルな力」などとも言い換えられ、スポーツを行う能力のうちの身体に直接関連、または由来する部分を強調した概念である。もう一步踏み込んでいえば、運動能力がスポーツを実践する能力の文化的、環境的要因に由来する側面も包含するのに対し、身体能力はその本能的、生得的側面を特化させる概念であるともいえよう。本論ではこの点だけでなく、後の節で論じる点にも着目して、「黒人身体能力」という言葉を設定する。
- 6) 筆者が筑波大学大学院や東海大学に学んだ元短距離スプリンターから聞いた話では、トレーニングの現場では、黒人アスリートに天性の才能があることはむしろ当然視され、この点を疑問視する風潮は皆無であるという。末続慎吾が2003年にパリで開催された世界陸上選手権で銅メダルを獲得した当時は、彼の走りが日本古来のナンバ走法の応用であるとされ、日本人の技能が黒人の天性に勝る日が近づいた証拠としてもはやされた。
- 7) 大学の授業でたびたび「黒人は天性のアスリートである」との発言に潜む人種主義の可能性を指摘したことがあるが、当惑し、反感さえ抱く学生が少なくない。そのような学生が口にする反論としてもっとも多いのがここに紹介したものである。
- 8) 黒人に固有の運動能力があるとの想定が言説空間に存在する点で共通しているとはいえ、日本人はそれをほぼ無批判に受け入れているのに対し、アメリカ人は争点として俎上に載せているという点に差異があることに、今一度注意を促したい。これは、黒人という「人種」の表象が、文化的文脈に応じて、異なるかたちで受け入れられていることを意味する。つまり逆にいえば、「人種」概念を支える言説と表象が、文化的に規定され、構築されているということである。こうした論点ゆえ、本研究は、人種概念の社会的構築性を検証する作業として位置づけることが可能である。人種概念の社会的構築性を検証する作業の代表例に、京都大学人文科学研究所を拠点とする「人種の表象と表現をめぐる学際的研究」(代表竹沢泰子)がある。その業績に、竹沢泰子編著『人種概念の普遍性を問う：西洋のパラダイムを超えて』人文書院2005年、同編著者に

よる『人種の表象と社会的リアリティ』岩波書店 2009 年などがある。

- 9) この立場に立つ研究として筆者は、科学研究費補助金による基盤研究 C「アメリカ合衆国における黒人身体能力神話およびスポーツへの固執と対抗言説・戦略」および武蔵大学総合研究所助成プロジェクト A（研究テーマ：アメリカ合衆国における運動能力・身体能力の人種間格差に関する言説・表象とその社会的影響）に取り組んでいる。後者が日本における神話の受容を踏まえた上で、アメリカにおける受容と批判の拮抗関係が及ぼす社会的影響に焦点を当てるのに対し、前者はアメリカにおける批判側の対抗言説・戦略が、神話をいかに覆そうとしているかを分析することをねらいとしている。以下の URL にて閲覧することができる。[<http://e-lib.lib.musashi.ac.jp/2006/archive/detail.php?i=00000000000000010306&f=1>]
- 10) 本節は拙稿『『黒人身体能力神話』浸透度の文化的格差をさぐる——概念規定と方法論を中心に——』2009『武蔵大学人文学会雑誌』第 40 巻第 4 号に基づいて書かれたものである。本節の諸点に関してのより詳しい記述は、拙稿を参照のこと。
- 11) Johann Friedrich Blumenbach, *De generis humani varietate nativa* (*On the Natural Varieties of Mankind*), MD thesis at University of Göttingen, 1776.
- 12) これらのいずれの呼称を採用するかは、アメリカ人の間においても合意がみられないようである。筆者は北米スポーツ社会学会（North American Society for the Sociology of Sport, NASSS）で発表者の採用する呼称に注目してみたところ、“African American” が最も多かったが、“people of color” や “black(s)” も少なからず用いられていた。教室など公の場では African American を用いるのが一般的だが、私的な場では black(s) が好んで用いられる傾向がある。
- 13) バラク・オバマが大統領選挙に勝利した直後、日本の新聞報道の見出しには「黒人初の大統領」との形容辞が頻出した。しかし 1 週間もすると、「黒人」という語句は、オバマ関連記事から急速に姿を消すようになった。例えば日経新聞のオンライン検索エンジンである「日経テレコン 21」で検索すると、オバマと「黒人」という表現を両方用いている記事が、当選が決定した 2008 年 11 月 5 日から 6 日に集中して掲載され、その後急激に減少する傾向を確認することができる。
- 14) 「現実」や「現実の」という日本語よりも、主体である個人が「現実的であると感じている」という主観性を強く含意する言葉として「リアリティ」「リアルな」を用いる。このニュアンスを伴う英語の “real” をうまく表現する日本語が見当たらないので、少々ぎこちなくなるとの批判を覚悟の上で「リアリティ」「リアルな」と表記する。以下「」は外して用いる。
- 15) Jim Myers, “Race Still a Player: Stereotypes pit Ability vs. Intellect,” *USA Today*, Dec. 16, 1991, 01 A.
- 16) Mel Elfin & Sarah Burke, “Race on Campus,” *U. S. News & World Report*, April 19, 1993.
- 17) S. L. Price & Grace Cornelius, “What Ever Happened to the White Athletes,” *Sports Illustrated*, December 8, 1997.
- 18) 我妻洋『偏見の構造——日本人の人種観』NHK ブックス 1967 年。
- 19) ジョン・G・ラッセル『日本人黒人観——問題は「ちびくろサンボ」だけではない』新評論 1991 年。
- 20) 山本敦久「サッカー解説『高い身体能力』って何?」『朝日新聞』2002 年 6 月 30 日 朝刊。
- 21) 映像はオデッサの町の景観の描写にはじまり、プレシーズンの練習風景、シーズン開幕と町の人々の興奮が高まる様子を追った後、初戦の試合模様へと移行する。この試合でブービー・マイ

ルズは大活躍をするものの、選手としての致命傷となる膝靱帯の損傷を被ってしまう。ここで引用したセリフは、この試合の実況を中継するアナウンサーのものであり、映画の前半三分のいくらのところに登場する。詳しくは映画『プライド：栄光への絆』ユニバーサル・ピクチャーズ・ジャパン 2004 年を参照。

- 22) この時「スポーツがうまい」や「身体能力がある」という性質が、先天的なものか否かについては、肯定的に言明される場合、言外に暗示される場合、一切示唆されない場合がある。こうした発言として表明される意識のあり方の差異をどのように整理するかについては、本節(4)を参照。黒人に固有の運動能力があるとの想定に焦点をあて、その社会的悪影響を多角的に論証した労作『ダーウィنز・アスリート』の中で、著者ジョン・ホバマンは、「ブラック」という概念と組み合わせて「ブラック・アスレティズム」なる語句を多用している。索引からだけでも、すくなくとも 54 ものページで用いていることがわかる。本書が「アスレティズム」の今日的用法を普及させる上で果たした貢献度は見逃せないものがある。John M. Hoberman, *Darwin's Athletes: How Sport Has Damaged Black America and Preserved the Myth of Race* (Mariner Books, 1997), 拙訳『アメリカのスポーツと人種——黒人身体能力の神話と現実』明石書店 2007 年。
- 23) 山本浩「パブリック・スクールとフットボール」『現代スポーツ評論』3 2000 年 39。
- 24) *New York Times*, Late Edition (East Coast), New York, N. Y., Apr 15, 1997.
- 25) Rosslyn, *Emerge*, Vol. 10, Issue 4, Feb. 1999, 99.
- 26) John Entine, *Philadelphia Magazine*, Philadelphia, Vol. 91, Issue 1, Jan 2000, 37.
- 27) *Wall Street Journal*, Eastern edition, New York, N. Y., Mar 16, 2005, D 10.
- 28) *US Fed News Service, Including US State News*, Washington, D. C., Feb 8, 2006.
- 29) 2003 年 8 月 29 日『日経新聞』朝刊。
- 30) 2006 年 12 月 30 日『日経新聞』朝刊。
- 31) 2002 年 6 月 17 日『朝日新聞』朝刊。
- 32) 2006 年 2 月 20 日『朝日新聞』朝刊。
- 33) 1998 年 3 月 25 日『読売新聞』朝刊。
- 34) 2001 年 12 月 25 日『読売新聞』朝刊。
- 35) 神話』について、より学術的な立場から、以下のような位置づけも可能である。周知の通り、近年において「神話学」なる学問体系を構築した貢献の多くは、ロラン・バルトに帰せられるべきであり、ここでの立論もバルトの学問に依拠することが可能である。バルトはその著書『神話作用』の中で、近代フランスにおいてブルジョワ的価値観が、社会的に構築されたものであるにもかかわらず、ブルジョワ階級がヘゲモニーを確立するにつれて、あたかも当然のものであるかの如くみなされるに至ったプロセスを検証し、それを「神話化」と呼び、結果として構築された価値観を「神話」と読んだ。ここでバルトが定義している「神話」の概念を用いて、「黒人身体能力神話」なる概念を構築することが可能である。ロラン・バルト(篠沢秀夫訳)『神話作用』現代思潮新社 1967 年を参照。
- 36) 日本において黒人身体能力をめぐる争点がないという問題はどこにあるのか。学界ではその問題性が当然視されるがゆえに不問に付され、一般社会では問題性が実感されないがゆえに不問に付されるという、二重の黙殺によって議論されることのないこの問いへの応答を以下のように整理しておく。第一に、黒人身体能力神話はステレオタイプとして、多様性の捨象を含む本質主義のあらゆる誤謬(たとえば、ジョナサン・マークス著、長野敬、赤松真紀訳『98% チン

バンジー：分子人類学から見た現代遺伝学』青土社 2004 年を参照）を伴う点で、否定されなければならない。近代西欧の哲学と科学の負の申し子ともいべき人種主義を破壊すべく、1930 年代以降、反人種主義の学知が構築され、蓄積されてきたにもかかわらず、その成果が日本人一般になかなか認知されず、安直な偽科学説が跋扈する現状に、警鐘を鳴らさなければならない。第二に、日本人の安易な人種主義への傾倒は、たびたび文化摩擦や誤解の原因になっていることに留意したい。第三に、心身二元論によって、身体的優越は知的劣等へと容易に読み替えられ、その結果、相手にとってより屈辱的な偏見・差別に転換される可能性が遍在することを指摘しておく。

- 37) 本調査に関して更なる検討が必要とされる点の 1 つは、アンケートと聞き取りいずれにしても、インフォーマントの記憶に頼らざるを得ないことである。この点についての筆者の立場については、第四節を参照。
- 38) 東京にある私立大学 J1 からの 18 名、北陸にある国立大学 J2 からの 12 名、大阪にある私立大学 J3 からの 4 名から成る。3 つの大学に籍を置く 34 名は、2 年次から 4 年次の男性 11 人と女性 23 人からなり、調査時の年齢は 19 歳から 22 歳、高校まで過ごした土地は、関東、北陸、東海、近畿、中国 5 地方に位置する 13 都府県とさまざまである。
- 39) A1 は、北東部にある私立大学である。
- 40) 日本人インフォーマントの選定と、アンケート、聞き取り両調査は、2005 年 5 月から 7 月に実施した。他方、アメリカ人インフォーマントに関する同様の作業は、同年 9 月から 2006 年 3 月に筆者が客員研究員として滞在した大学で実施した。以下で述べるとおり、1 大学のみからのサンプルは、両調査の成果に基づいてより大きな社会を論じようとする際に大きな制約となることを否定できない。本研究は、この点を 1 つの理由として日本側についての議論を主として、アメリカ側についての事例を参考に留めている。
- 41) 「黒人」という表現に内在する問題性に鑑み、アンケート票では途中で「黒人」を「アフリカ系」と定義し直している。これが人種を表象する文言が引き起こす問題を回避する手段として最適かどうかは、なお検討が必要である。
- 42) 本調査研究の目的は、それぞれの社会に生きるインフォーマントから得られるデータに基づいて、比較文化的な試論を提起することにある。日米間の比較という枠組を設定しているが、インフォーマントの経験が、アメリカの 1 大学と日本の 3 大学に所属する学生の経験に限られるものであることはいうまでもない。殊に、アメリカ人インフォーマントがみな 1 つの大学に所属し、その数も少ないことによる制約は厳として存在している。（アメリカ人インフォーマント 21 名は、11 名の女性と 10 の男性からなり、8 つのエスニック集団に所属し、13 の州・国家からの出身者からなる。その意味で多種多様な背景を負った人々である。しかし全員が 1 つの大学に在籍していることも事実である。したがって、これらのインフォーマントから得られる情報は、同大学のレベルやカラーを反映したものであることは否定できない。）しかし、かく留保した上で、本研究の分析が、より大きな世界における人種主義言説の浸透や受容の度合を考察するための、より精緻な方法論に基づいた作業の端緒を開くものとなることを期待したい。
- 43) 本節は拙稿「黒い肌の『異人種』との遭遇——『黒人身体能力神話』浸透度の文化的格差をさぐるための序論的考察として——」『武蔵大学総合研究所紀要』第 18 号 2009 年に基づいて書かれたものである。本節の諸点に関してのより詳しい記述は、拙稿を参照のこと。以下の URL にて閲覧することができる。[http://e-lib.lib.musashi.ac.jp/2006/archive/data/k0018-20/for_print.pdf]

44) 以下の議論は、次の文献を参考にしている。G. Levinger (レヴィンジャー) & D.J. Snoek (スノーク) *Attraction in relationships: A new look at interpersonal attraction* (General Learning Press, 1972), 堀洋道他編著『新編社会心理学』福村出版 1997 年, 114-115, 末永俊郎・安藤清志編『現代社会心理学』東京大学出版会 1998 年, 104-105, 大坊郁夫・奥田秀宇編『親密な対人関係の科学』誠信書房 1996 年, 29-30。

45) 「会う」行為と「話をする」行為はだいたいにおいて同時に発生するが、インフォーマントの語りからは、例えば友人とバーに行き、そこで一緒になった黒人と飲んだが、一切話をしなかった場合のように、「会う」機会と「話をする」機会が一致しないケースも確認できた。したがってアンケートや聞き取りでこの区別を設けることは無意味ではないと考えた。

46) アンケートでの質問の記述は以下のとおりである。なおアンケートで試みた「黒人」と「アフリカ系の人」に関する呼称上の配慮については本注後半を参照。

いままでアフリカ系の人と、あなたがどのような関係にあったかについて質問します。あてはまるものすべてを選び、その番号を回答記入欄に記入してください。

- 1 見かけたことがある
- 2 会ったことがある
- 3 話をしたことがある
- 4 知人にアフリカ系の人がいる
- 5 友人にアフリカ系の人がいる
- 6 親戚や家族にアフリカ系の人がいる
- 7 その他

アンケート調査ではインフォーマントそれぞれに、これら7つの選択肢から当てはまるものすべてを選んでもらうことによって、それぞれの段階での経験の有無を確かめ、経験がある場合はその内容を詳しく記述してもらうよう依頼した。聞き取りでは、不明な点、不確実な点などの補足・訂正を兼ねつつ、その内容をさらに詳しく尋ねた。

アンケートでおこなった呼称上の配慮について説明しておく。日本人の日常会話で「黒人」なる呼称が流通している事情は上に述べたが、この事実を鑑み、アンケートでは最初は「黒人」を用いざるをえなかった。しかし、途中で次のような文章を挿入し、「黒人」を「アフリカ系の人」と言い換える旨説明した。「アフリカ系の出自をもつ人々を、日本では一般に『黒人』と呼ぶことが多いようですが、以下では、『黒人』に該当する人を『アフリカ系の人』と呼ぶことにします。例えばアメリカ合衆国では、市民権を有する『黒人』を『アフリカ系アメリカ人 (African American)』と呼びます。アフリカ系アメリカ人も、アフリカ系の人に含まれます。」この解説の有効性・有用性および適正さについて（これが人種を表象する文言が引き起こす問題を回避する手段として最適かどうかは）更なる検討に付されなければならないが、とりあえず、こうすることによって人種偏見などの弊害を招く可能性を排除する努力あるいは教育的配慮を志したことを申し添えておく。また、以下に引用するインフォーマントの語りに、「黒人」や「アフリカ系の人」という表現が混在するのは、アンケートで与えた説明が一因であるといえよう。

47) 「知人」として記憶している相手は、いろいろあった関係のなかで良い思い出だったがゆえに記憶に残っているのでは、だから「知人」との経験をよいものとみなすのは当然では、というような反論も考えられる。しかし、「知人になる」段階でのネガティブな経験の報告が皆無であるという事実は、やはり重く受けとめるべきであろう。むろん、ネガティブな事例はさらに調査すれば出てくるだろうが、そこにもステレオタイプの届かない、人と人のリアルな交流・やりとり

が存在している可能性は低くない。

- 48) ブラウンによれば、「ある人をステレオタイプ化ということは、その人の所属集団の成員全員もしくは大部分が共有しているとみなされている諸特性を、その人も備えているとみなすこと」であるとされる。そしてそれを破る契機を、本文で述べたように定義しているのである。R・ブラウン（橋口捷久，黒川正流編訳）『偏見の社会心理学』北大路書房 1999 年，82 参照。
- 49) 「言葉または概念」としたが，ここでは「人種」や「黒人」の記号としての側面を「言葉」として捉え，こうした記号が表象するものの内容，つまり「事物の本質的な特徴とそれらの連関」を指すものが「概念」である。本論では，両者に区別をつけることにあまり意味はないので，以下では主として併記して用いることにする。また，以下で定義するように，言葉としての「人種」と「黒人」を最初に聞いた契機に「遭遇」し，それ以後最初に使う時点で，これらの語を「習得」したものとみなす。
- 50) Thomas F. Gossett, *Race: the History of An Idea in America* [New Edition] (New York: Oxford University Press, 1997), xv-xvi を参照。
- 51) 20 世紀を通じて，プロボクシング界の王者（とりわけヘビー級）の座に黒人がつくことが多かったが，興味深いことに 21 世紀になってからは，黒人の存在感が急激に減少しているようにみえる。この変化が黒人身体能力神話に与える影響は少なくないと考えている。したがって，ここでいうステレオタイプはもはや消滅しつつあるといえるのかもしれない。
- 52) 筆者自身の経験である。
- 53) 後にみるように，「人種」という言葉の意味には多元性があり，そこから生ずるあいまいさゆえ，アンケートの時点では設問の意味を了解しかねて「いいえ」，「わからない」と答えたことが，聞き取りで確認された。
- 54) 「人種」を「初めて聞いた」時期：小学校以前 1 名，小学校前半 1 名，小学校後半 15 名，中学校前半 8 名，中学校後半 4 名，高校が 2 名，「わからない」または無回答が 3 名（聞いたことはあるが，時期を特定できないもの 2 名が含まれている）。このような原始的な集計に統計の概念を用いるのは不適切かもしれないが，「中間値」は小学校後半である。
- 55) 「人種」を「初めて使った」時期：小学校後半が 7 名，中学校前半が 9 名，中学校後半が 3 名，高校 2 名，「わからない」または無回答が 13 名（使ったことはあるが，時期を特定できないもの 7 名が含まれている）。中間値は中学校前半である。
- 56) 「黒人」を「初めて聞いた」時期：小学校以前 2 名，小学校前半 10 名，小学校後半 15 名，中学校前半 5 名，中学校後半 1 名，無回答 1 名。中間値：小学校後半。
- 57) 「黒人」を「初めて使った」時期：小学校前半 8 名，小学校後半 10 名，中学校前半 5 名，中学校後半 1 名，高校 2 名，無回答 8 名。中間値：小学校後半。
- 58) 以下の発言における状況の中には，「聞いた」という行為に直接結びつかないもの含まれているが，『人種 / 黒人』という言葉は初めて聞いたのはどういう状況でしたか」という問いへの回答として得た説明からの引用は，なるべくそのまま用いるものとする。遠い昔に「聞いた」という記憶には常に曖昧さがつきまとい，その結果として「聞いた」という行為に結びつかない回答が成されたのであろう。
- 59) アンケートでアイは，「人種」という言葉・概念を初めて使った状況を教室以外とした唯一のインフォーマントだった。しかし聞き取りで確認したところ，その記憶はとても曖昧で，本人がアンケート結果を撤回する結果となった。そのため，ここでは「わからない」との回答に数えている。『人種』という言葉をはじめて使ったのはどういう状況でしたか」へのアイの回答は次の

通り。「肌の色を比べた時です。たぶん、外で歩いている人をみたときとかやと思うんですけど。外国人と日本人の肌の色をくらべて……『人種』っていうよりは、やっぱり『黒人』だったかな……たぶん使ったことはあると思うけど、使ってるって意識はない……記憶にないので、具体的な話をしてっていわれたら、ないですね。」

- 60) アンケートでは提示しなかったが、聞き取りの結果に基づいて次のようなカテゴリーに整理した。「授業で」、「メディアを通じて」、「家族との会話で」、「隣人にいたから」、「友人との会話で」、「実際に見て」などである。
- 61) 具体的な状況を述べた 33 名中、「授業で」17 名に対し「授業で」以外が 16 名に達している。
- 62) ウォーレン・クロマティ (Warren Cromartie)。読売ジャイアンツに 1984 年から 90 年まで在籍し、89 年には全国制覇の立役者として MVP に輝いたスラッガー。
- 63) ベン・ジョンソン (Ben Johnson)。1988 年のソウル五輪の男子短距離 100 M で優勝しながら、ドーピング違反で王座を追われた。
- 64) ステファン・マヤカ (Stephen Mayaka)。ケニア出身で日本国籍の元陸上競技選手。
- 65) オスマン・サンコン (Ousmane Sankhon)。ギニア共和国出身で、『笑っていいとも!』への出演をきっかけにお茶の間の人気者になったタレント。
- 66) 「黒人」との遭遇が、具体的な競技が野球であれ、陸上であれ、バスケットであれ、とても高い割合でスポーツを媒介として進行した点に注目したい。これは遭遇の時点で「スポーツマン、アスリート」としての黒人イメージが、日本の若い視聴者に植え付けられた可能性を示唆する。多くの日本人にとって、遭遇の時点で、意識という土壤に神話の種子は蒔かれているのかもしれない。
- 67) ヘレン・バナマン著 森まりも訳『チビクロさんぽ』(北大路書房 1997 年) のこと。出版社の内容紹介によれば、「おふざけ本」や「便乗本」の意図はなく、『ちびくろサンボ』論争によって黒人の蔑称とみなされた主人公の名前を変えることで原作の復活を試みた、まじめな本であるとのことである。
- 68) インフォーマントの語りを、本節で展開した解釈に基づいて暫定的に評価すると、肯定的 6 件、否定的 5 件、中立的 7 件となる。肯定的な事例は主としてメディアを通じてのものであり、否定的な事例は主として実際の人間関係(友人、家族)でのやり取りからのものである。遭遇と習得の状況によって評価が偏る傾向が顕著であり、これは日本人の黒人観が分裂的であるという本節の主張を裏付ける一因を成しているといえるだろう。
- 69) アメリカ人インフォーマントの経験については、拙稿『『黒人身体能力』に対するアメリカ人の認否のダイナミクス——『人種』/『黒人』という言葉・概念との遭遇とその習得を中心に——』『武蔵大学総合研究所紀要』第 19 号 2010 年を参照。
- 70) 宮本正興・松田基二『新書アフリカ史』講談社現代新書 1997 年、10、岡倉登志・北川勝彦『日本—アフリカ交流史 明治期から第二次世界大戦期まで』同文館 1993 年、iv。その他に、次も参照。鈴木正行『日本の新聞におけるアフリカ報道 マクブライト委員会報告の今日的検証——外国通信社への記事依存度の変遷を視座にして——』学文社 2005 年、1、376。石田洋子『アフリカに見捨てられる日本』創成社新書 25 2008 年、1。
- 71) 戸田真紀子「Ⅲ. 日本人のもつアフリカのイメージ」川端正久編『アフリカと日本』勁草書房 1994 年、46、39。
- 72) 興味深い指摘なので、原文を記載しておく。“[T]here is more genetic variation among Africans than between African and Eurasian populations.” from “Chapter 14: Evidence

日本社会における「黒人身体能力神話」の受容（川島）

for the 'natural' east African athlete," by Robert A. Scott, et al, in Yannis Pitsiladis, et al, eds., *East African Running : Towards a Cross-Disciplinary Perspective* (London : Routledge, 2007), 265.

73) 藤田みどり『アフリカ「発見」：日本におけるアフリカ像の変遷』岩波書店 2005 年, 296。

要 旨

「黒人は固有の運動能力を有する」という意味での「黒人身体能力神話」を研究の対象とするにあたって、次の二つの立場を措定することができる。第一は、「神話」の浸透を国際的な広がりをもつ現象として捉え、その起源と形成・普及の過程をグローバルな視点から解明しようとする立場である。第二は、「神話」の浸透におけるすぐれて日本的な状況に注目する立場である。ここで問われるべきは、「神話」の歴史性や時代的文脈におけるその性質であると同時に、否それ以上に、「量的」あるいは「比率的」な展開のありかたである。すなわち、グローバルな水準に照らし、「なぜ日本において、かくも無批判に『神話』が受容されるのか」である。

本論は第二の立場に立ち、「神話」の日本における受容の過程を、「人種」「黒人」という言葉・概念との遭遇とその習得を中心に解明することを目的とする。具体的な構成は以下の通りである。まず第一節にて、「黒人」「身体能力」「神話」などの主要概念に定義を与え、文献調査や意識調査の結果を紹介し、日米間の神話に対する意識や態度の差異の度合を明らかにする。第二節では、研究調査の方法論を詳述する。特に、アンケートと聞き取りの結果に基づいて設定した、神話受容の過程を解明するために検討すべき4つの経験領域（1. 実際の「黒人」との遭遇、2. 「人種」や「黒人」という言葉・概念との遭遇とその習得、3. これらの言葉・概念の公的教育カリキュラムによる学習、4. 「神話」を支持するに至った契機と体験）の説明に力点を置く。第三節では、第一の経験領域に関してすでに発表した主要な分析結果を報告し、第四節では、第二の経験領域に関して具体的な分析を行う。最後にこの分析に続く作業を展望し、本研究調査の意義を指摘する。

キーワード：人種、身体能力、黒人、アメリカ、アフリカ

Summary

The image of the African American as a genetically-advantaged athlete prevails in Japanese society even today. According to a preliminary survey done at several universities in Japan, more than 90% of respondents (all Japanese university students) answered that African Americans are better athletes than European Americans—let alone the Japanese—and attributed the reason to biology or genetics. In other words, they still cling to the old stereotype of the innateness of African American athleticism. These results may surprise participants in the American intellectual community, where the problematics of such stereotypes have long been the subject of study and intervention. They are an unfortunate indication that in terms of knowledge and experience, Japanese attitudes toward the sensitive issue of racial differences are well behind those of their American counterparts, calling to mind racial attitudes in the era of Jesse Owens and Joe Louis. Following a summary of American/Japanese major differences in the respondents' attitudes toward race, this presentation analyzes why the Japanese answered in the way they did, and drawing on information derived from the replies of their American counterparts, searches for ways in which such attitudes can be shifted toward a more balanced perspective.